

ちょっと ブレイク しませんか?

第 38 回

「偉大なるマルグリット」(2015年仏蘭西)
「マダムフローレンス」(2016年英国)



イソップ寓話に「豎琴弾きの歌手」と題する小話がある。

「下手くそな豎琴弾きの歌手が、いつも漆喰塗りの家で歌っていたが、声がよく反響するので、自分がなかなかの美声だと思えるようになった。そして、自惚が昂じ、劇場に出演しなければならぬと決心したが、舞台上でみると、その歌は箆にも棒にもかからず、石を投げつけられ追い出された。

今回は原作が同じで、仏、英で各々独立制作された二作品を紹介する。

「偉大なるマルグリット」(2015年仏蘭西)

ひどい音痴にもかかわらず人前で歌を披露することに喜びを見いだしたマダムの数奇な運命を描く。伝説の音痴といわれた実在のソプラノ歌手フローレンスの歌声に刺激を受けおかしきも切ない物語に仕上げた。音痴に気付かぬまま音楽に純粋な情熱を傾けるマルグリッド。パリから少し離れた貴族宅で開催されるサロン音楽会を訪れた新聞記者のポーモンは、あまりに音痴なマルグリットの歌声に呆れたものの、ポーモンはある野心から彼女を絶賛しパリの音楽会に出演者として招待する。これを機に、観客に自らの歌を披露する楽しさにはまったマルグリットは、自分が音痴であるとも知らず有名歌手からレッスンを受ける日々が始まるのだった。

「マダムフローレンス」(2016年英国)

こちら本家のフローレンスは内縁の夫に支えられて歌に励む。ちょっと風変わりな夫婦愛の物語になっている点が注目だ。内縁の夫のシンクレアは、英国貴族の出という胡散臭い触れ込みの男。財産目当てで近づいたことが容易に想像できる。が、フローレンスの秘書兼夫の「仕事」を長年続けた今の彼は、ある時は楯となりある時は毛布となってフローレンスを守り抜く。

イケメンのシンクレアが、年上でしかも美人とは言い切れないフローレンスを本気で愛するのは何故か?情熱があれば何でもできると信じて歌手への道を突き進むひたむきさこそが、シンクレアを魅了してやまないフローレンスの真骨頂だった。カーネギーホールでのリサイタルが行われたのは第二次大戦終盤。戦争の醜さに疲弊した人々はフローレンスの破天荒な歌声に現実逃避を求め無邪気さに救いを感じた。「癒し系歌手の元祖」とも云える。そのリスペクトの感情が心地よい映画作品となった。

職場の二次会で上司のカラオケを聴かされるとお義理でも拍手してしまう。拍手に乗じて歌上手と勘違いした上司はマイクを離さない。日本のどこに行っても見られる光景だ。自覚がない音痴ははた迷惑だが、反面癒しにもなると教えた映画作品だった。ちなみに音痴は運動性と感受性に二分されている。「音痴」は、耳で聴いた音階を自らの発声で再現できないのだが、脳内の情報処理と発声機構の間になんらかの障害があるのかも知れない。「好きこそものの上手なれ」されど「下手の横好き」、さて貴方はどっち?最近では独りカラオケで励む人も増えているとか。歌一つにしても自己の客観視は容易ではないようだ。それにしてもイソップの時代から音痴が記載されていたのは誠に興味深い。



かゆ かわ ゆう へい
粥川 裕平
(精神科医・映画評論家)

名古屋工業大学 名誉教授
かゆかわクリニック院長